



公益財団法人 School Aid Japan

バングラデシュ通信

2013年12月号 No. 12



バングラデシュにおける教員の就職事情と NDMHS 教員採用試験

Narayankul Dream Model High School (NDMHS) は 11 月に教員採用試験を行っています。

一次試験には、約 600 名の応募の中から選ばれた 120 名が集まり、学校説明会后、小論文、適性検査、筆記試験を行いました。

反政府運動が活発化していることは前回、取り上げましたが、この日もダッカ大学内部や近隣での反政府デモ活動（大音量の演説や行進）が行われました。そのため、移動しようにもバスが少ない状況にも関わらず、候補者達はその中でも頑張って来てくれました。

二次試験も同様の状況の中、一次試験を合格した 34 名が、グループディスカッションと模擬授業を行いました。この後には最終面接を控えている状況です。



学校説明会



NDMHS の教育理念に共感し
応募してきた候補者たち

募集時、新聞やインターネット広告を使い、広く採用を呼びかけました。

結果、冒頭にも記載したように、最北、最南の県を含め、バングラデシュ中から約 600 通の応募がありました。

人口の多さに対して、職場が全然足りていないバングラデシュ。さらに就職時はコネクションがものを言うということもあり、大勢の有能な若い人材が就職できない状況に置かれています。それは教員志望の方々にとっても同様です。

バングラデシュのモデルとなる教育を目指す NDMHS。広告に記載した現在の雇用システムは、給与こそ高いとはいえないものの、バングラデシュにおいてはしっかりとした基準のものだと言えます。情熱があり、チャレンジしキャリアを積みたい先生方からすれば、良い環境であることは間違いありません。開校したての学校にこれだけ応募が集まったということには、そういった理由もあるのかもしれませんが。

一方、交流のある学校の校長先生方の話によると、バングラデシュの教育現場では、先生をせっかく採用しても、無断での遅刻・欠席や、急に来なくなるという状況が当たり前起きると聞きました。採用試験を簡単な面接で済ましてしまっている学校が多いため、教員の人間性を見抜きにくい事が、その理由の一つかもしれません。

より良い教員採用手順をつくり、示すことも、本校のミッションに含まれると考えております。



試験を監督する NDMHS 教員

バングラデシュの教育制度と現実

バングラデシュにおける第6学年(中学一年生)の教科は次の13(選択を含めると15)教科です。英語Ⅰ・Ⅱ、ベンガル語Ⅰ・Ⅱ、数学、理科、社会、宗教(イスラム教又はヒンドゥ教)農業又は家庭科、体育、芸術、ICT、職業

この中で、一年間の成績が基準に満たない教科が一つでもあれば、その生徒は原級留置となります。一見すると厳しいと思われそうなこのシステムですが、実はバングラデシュには義務教育である小学校から原級留置制度があります。バングラデシュに赴任したての私は、原級留置制度を実施している事を聞き、習熟度の向上を図っていて良いのではないかと思ったこともあります。

しかし、現実には、少し違っていました。実際に学力が無くても、教育庁に賄賂を払えば合格になったり、採点時、国側が不正解の箇所を正解にしたり、ひどい場合は、試験を受ける子のそばで親が助言することがあると聞きました。これらの状況はかなりの頻度で行われていると聞きます。

徹底すれば、メリットになり得る原級留置制度も、管理が行き届いていないせいで、形骸化しています。本校ではスタートした当初から、原級留置制度を徹底することを公言した上で、生徒への普段の学習指導をサポートしてきました。

その方法の一つが「平常点システム」です。このシステムは、学習習慣を付けさせることを目的としたものです。小テストや宿題を評価に反映させることで、最初は低かった宿題の提出率も今では100%です。生徒の学力層は広く、必ずしも全員が進級できないかもしれません。

しかし、必要な学力や、能力を生徒につけさせるためには、制度を徹底する厳しさと同時に、生徒に寄り添う指導が重要です。当たり前の事を当たり前に実行することで、良い循環を生むきっかけとしたいと思います。